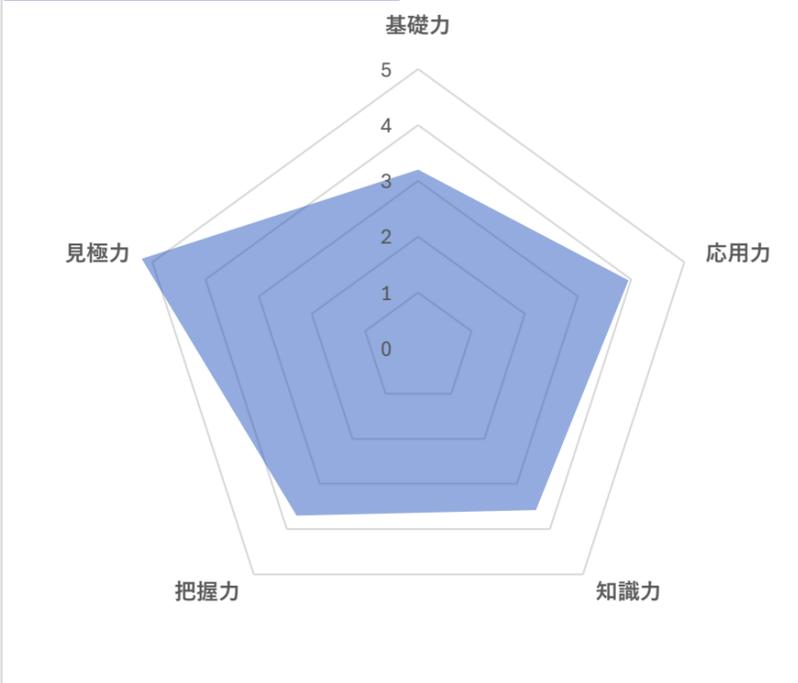


総合分析

試験区分	一般 (前期)
------	---------

制限時間	60分 (理科 2科120分)	大問数	全 4 問
------	-----------------	-----	-------

合格に要する能力 (5段階)

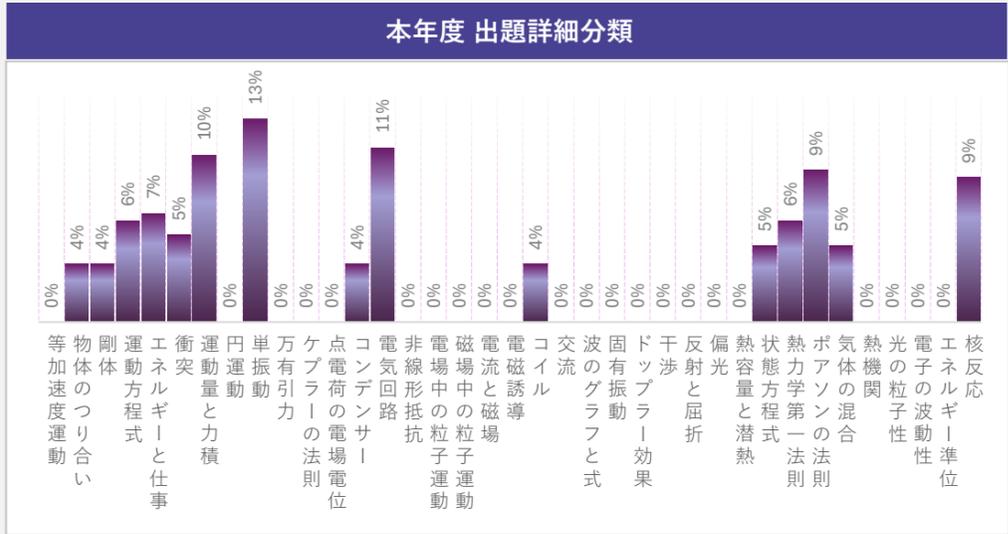


合格に要する能力 (5段階)		
基礎力	3.0	原理についての理解
応用力	3.8	演習経験による慣れ
知識力	3.4	用語を正確に覚えているか
把握力	3.5	臨機応変に状況を把握する力
見極力	5.0	解きやすい問題を選択する力

出題分野	
力学	48%
電磁気学	18%
波動	0%
熱力学	25%
原子物理	9%

本年度 解答形式	
答えのみ記述	100%

本年度出題テーマ一覧	
第 1 問	加速系の単振動と相対振動
第 2 問	断熱自由膨張と断熱変化
第 3 問	中性子線の発見
第 4 問	剛体のつり合い, 抵抗回路, 次元解析



特殊問題の有無	近似計算なし	グラフなし
正誤問題あり	理由記述なし	数値計算なし

特記事項: 次元解析が出題された

総合評価

難度	3.7	最難を 5 とする問題自体の難度	やや難しい	一次合格に必要な正答率 (予想)	66%
分量	85分	完答に要する時間 (制限時間は60分)	多い	標準	

入試の特徴と対策

- ▶ 入試問題としてありふれた題材が多い。単純に演習量で十分に対策できる。
- ▶ 概ね法則の運用に関する応用的な出題である。物理計算への慣れが必要となる。
- ▶ 同時に複数の事柄への理解を要する出題が多い。独力で解法を組み立てる力を要する。

入試から見る大学が求める学生像

多くの大問で後半に急激に難度が上がるため、完答できる大問は少ない。その少ない大問と、前半の解ける部分をしっかりと解答すれば合格圏には達するだろう。かなりの応用力が問われる。難しい部分も難しいとはいえ他に類がないものではなく、難関大学の典型的な出題がほとんどである。このため、基礎理論の理解より「質より量」で、とにかく大量に問題演習をすることが効果的である。総じて堅実な学生が求められているのだろう。